

滋賀県東近江市で、自宅のベッドに横たわる98歳の女性。1週間前から寝たきりとなり、前日から食事もほとんどとれなくなった。3月上旬のことだ。

国 出づる 医

⑤ 「資源」を生かす

往診に来た永源寺診療所の医師、花戸貴司所長(44)が問いかける。「病院行くか? 家にいたい?」「……ここがええんや」。かすかにまぶたを開けた女性が答えた。

近くに住む孫(44)も家族で最期の時間を大切に過ごしたい。花戸所長は苦痛をとるための方法などを訪問看護師や薬剤師、介護ヘルパーと話し合った。2日後、女性は自宅で静か

に息を引き取った。

とても命や人生の役割について深く考えるきっかけになる」と花戸所長はいう。兵庫県尼崎市の長尾クリニクスの長尾和宏院長(56)はこれまでに約8000人を在宅でみとった。過剰な投薬や治療をやめ、穏やかな最期を迎える「平穏死」を実践する。

診療所がある東近江市の永源寺地区は人口約6千人の3割以上を高齢者が占める。自宅で最期を迎えることを望むが希望し、半数が実現している。「家族にと

ただ、あらゆる治療に消極的なのではない。長尾院長は、胃に穴を開けてチ

完治せずとも 穏やかな人生

限界と向き合う

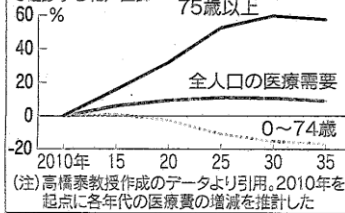
ユーブで栄養剤などを入れる胃瘻(いろう)を勧めることもある。胃瘻は「不要な延命措置」の代表ととられがちだが、「治さないといけないものと、そうでないものを、はっきり説明したうえで対応する必要がある」という。

「まあまあ型」と「とんとん型」。近年、医療現場でこんな言葉がしばしば聞かれる。

75歳以上の医療需要は急速に増加する



半数が自宅で最期を迎えている滋賀・永源寺地区で往診する花戸医師



病気の完治を目指す」と速に高まる」と指摘する。このことに対し、完治せざるも地域で生活ができるよう「とんとん」型を提供しようとする病院が多い。病院経営管理などが専門の高橋泰・国際医療福祉大学教授は「75歳を過ぎるとまあまあ型を必要とする比率が急増する」と指摘する。

患者の声に配慮 「とんとん」「まあまあ」を提唱した永生病院(東京都八王子市)の安藤高朗理事長によると、カギを握るのは患者のトリアージ(治療の優先度を決める緊急度判定)だ。病状に加えて本人や家族の希望を聞き、高度な専門医のもとで徹底的に治療するか、慢性期対応の病院などでじっくりみて

もう一つを決める。安藤理事長は「最終的には患者本人の意思が優先される。どう生きたいのか考えておくことが重要だ」と話す。日本の医療は、すべての患者を100%健康にする目標に向かって進んできた。しかしその限界は見え始めている。年齢ジラミツドの変化に合わせ、限られた医療資源をどう分配するか。患者側にも「まあまあ」を受け入れる意識改革が必要だ。持続可能な医療の設計図を描くために一歩を踏み出す時は今しかない。

「この頃おわり」(関連記事を社会面と電子版に▼Web刊▼コラム)